

『源氏物語』 「宇治」の女君たち

— 〈橋姫〉変奏譚として—

磯部 一美

はじめに

大君、中の君、浮舟は、同じ八の宮の娘として生まれながら、その〈へ生〉の軌跡は三者三様でまったく異なるものである。しかし、それぞれの人生のありよう、結末はともかくとして、それぞれの姫君について語られる固有の物語の、その始発の段階に目を向けたとき、三人が皆例外なく〈宇治川の情景〉の中に置かれていることを見逃してはなるまい。

本稿は、三度繰り返し返して語られる〈宇治川の情景〉の意味を、その発想の根底にある「宇治の橋姫」伝承とのかかわりの中で考察するものである。

一、「宇治の橋姫」とは何か

「宇治の橋姫」が初めて文学の舞台上に上るのは、『古今和歌集』所

『源氏物語』 「宇治」の女君たち（磯部 一美）

収「題しらず」「読み人しらず」の次の三首である。

①さむしろに衣かたしきこよひもや我を待つらむうちのはしひ
め
〔巻第十四恋歌四〕¹⁾

②わすらるる身をうちはしの中たえて人もかよはぬ年ぞへにけ
る
〔巻第十五恋歌五〕

③ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれ
ば
〔巻第十七雑歌上〕

①は、別業宇治の地にあつて、空しく男の来訪を待ち続ける女を、都にいる男の立場から詠んだ歌である。「狭筵」には「寒し」が、また「橋」には「愛し」、「(都の)端」の意がかけられている。②は、宇治橋の中絶えによそえて、女が男に顧みられなくなった絶望感を詠んだ歌である。仲が絶えて長い年月が経ってしまったが、しかし未だその男を忘れられずにいるという意。

そもそも「橋姫」とは、「大昔我々の祖先が街道の橋の袂に祀って

いた美しい女神⁽²⁾」のごとであつた。「水辺、特に橋は精霊の宿るところとされており：『宇治の橋姫』はその守り神として最もよく知られるものだつた⁽³⁾」のである。このことは、③歌初句「ちはやぶる」という枕詞（神または広く神に関わるものにかかる）からも窺い知ることができよう。また、「宇治の橋姫」についての逸話は、『奥義抄』『顕注密勘』等に「橋姫の物語」としてその存在が知られているが、先に触れた通り『古今集』以前の使用例が見当らないこともあり、ここではその原型が、荒らぶる宇治川の神を鎮め、破損・流失を防ぎ橋を守る女神（巫女）であつたとの理解にとどめておくこととする。⁽⁵⁾

二、三人の「宇治の橋姫」

『源氏物語』「宇治十帖」の基底には「宇治の橋姫」伝承があり、それが『古今集』に詠まれた範囲を出るものではないことは既に指摘されているが、では「宇治の橋姫」になぞらえられる人物は誰かということになるか、その解釈は必ずしも一通りではないようである。⁽⁷⁾しかしここでは、直接「橋姫」と呼び掛けられる大君と中の君、また直接呼び掛けられるわけではないが、「衣かたしき今宵もや」〔浮舟一四七頁〕と薫に口ずさせ、また匂宮に「かたしく袖を我のみ思ひやる心地しつる」〔同〕と思わせる浮舟をも加えて、三人それぞれ「宇治の橋姫」像を、その物語の筋に添いながら見ていくことにしたい。

(1) 〈大君〉の橋姫物語

晩秋、薫は例の如く突然思い立って宇治を訪れる。しかし折悪しく八の宮は参籠中であり、代わりに応対する姫君たちに交誼を訴えるものの、姫君たちはなかなか応じようとしない。薫はそんな彼女たちの境遇と心中を慮り、歌を詠みかけてその場を立とうとする。

…かのおはします寺の鐘の声かすかに聞こえて、霧いと深くたちわたれり。

峰の八重雲思ひやる隔て多くあはれなるに、なほこの姫君たちの御心の中ども心苦しう、何ごとを思し残すらん、かくいと奥まりたまへるもことわりぞかしなどおぼゆ。

「あさぼらけ家路も見えずたづねこし槇の尾山は霧こめてけり

心細くもはべるかな」とたち返りやすらひたまへるさまを、都の人の目馴れたるだになほいとことに思ひきこえたるを、まいていかかはめづらしう見ざらん。御返り聞こえ伝へにくげに思ひたれば、例のいとつつましげにて、

雲のゐる峰のかけ路を秋霧のいとど隔つるころにもあるかな

すこしうち嘆いたまへる気色浅からずあはれなり。

〔橋姫一四八頁〕⁽⁸⁾

山寺の「鐘の声」は霧に隔てられ、憂いに沈む八の宮の嘆息はか

すかに運ばれてくるのみである。法の友として心を通わせ合うことを期待し来訪した薫の八の宮への思いは、「峰の八重雲」によって遠く隔てられてしまっており、ゆえに薫はますます孤愁を深めるより他はない。「槇の尾山」の「霧」立ち籠める風景は、そのまま薫の心の姿に重なるものとして読まれなければなるまい。また、大君の返歌中の「峰のかけ路」は父八の宮が籠もっている場所であり、それは雲居の遙かであるのみならず、秋「霧」によっていつそう隔てられてしまっている。父宮を思いやりながら、しかし顧みられない大君の孤絶感はなお深い。八の宮の不在、そして秋「霧」は、それぞれの孤絶感をいや増すものであり、ここに連続して描かれる二度の贈答歌は、その孤絶感の共有によって奇しくも二人の心が通じ合ったことを語っているのであった。この贈答に飽き足らない思いを抱いた薫は、さらに従者の語る網代漁の様子に「宇治川の情景」を思い浮かべ「橋姫」の歌をおくる。

「網代は人騒がしげなり。されど氷魚もよらぬにやあらん、すさまじげなるけしきなり」と、御供の人々見知りて言ふ。あやしき舟どもに芝刈り積み、おのおの何となき世の営みどもに行きかふさまどもの、はかなき水の上に浮かびたる、誰も思へば同じごととなる世の常なきなり。我は浮かばず、玉の台に静けき身と思ふべき世かはと思ひつづけらるる。
硯召して、あなたに聞こえたまふ。

「橋姫」の心を汲みて高瀬さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬる

「源氏物語」「宇治」の女君たち（磯部 一美）

ながめたまふらむかし」とて、宿直人に持たせたまへり。いと寒げに、いららぎたる顔して持てまゐる。御返り、紙の香などおほるけならむは恥づかしげなるを、ときをこそかかるをりはとて、

「さしかへる宇治の川長朝夕のしづくや袖をくたしはつらん」

身さへ浮きて」と、いとをかしげに書きたまへり。まほにめやすくものしたまひけりと心とまりぬれど、「御車率て参りぬ」と、人々騒がしきこゆれば、宿直人ばかりを召し寄せて、「帰りわたらせたまはむほどに、かならず参るべし」などのたまふ。

「橋姫一四九―一五〇頁」

この贈歌中の初句によって、大君は「宇治の橋姫」伝承の主人公としての性格を付与されることになる——「男」の「来訪」を待ち続ける「女」。実際は「父」の「帰宅」を待つ「娘」であるのだが、薫が伝承の世界を仮構することによって、その世界が同時に招き寄せずにはおかない和歌的情緒の世界に転移する自由が大君に開かれることになったのである。「棹のしづく」に「袖濡る」という和歌的類型に応ずる形で、その誇張表現としての「袖朽たす」が導かれるのであり、その結果、八の宮の不在に対する悲嘆という先の贈答の主題を越えて、「逢えぬ嘆き」という普遍性を、換言するなら「恋の苦悩」という次元まで、後者の贈答は主題を拡大することになったのである。

この場面に描かれた二度の贈答については、内容的には必ずしも両者の接近を語るものではないが、形式的には男女の典型的な呼吸によつており、とりあえず両者の困難な関係は一步踏み出したのである、とまではすでに言われているが、むしろ以上のように、より積極的に評価されるべきであろう。したがって、この場面は結果としてその基底に濃く恋愛の情趣を漂わせることで、今後、他ならぬ薫と大君の「宇治の橋姫」物語が展開されてゆくであろうことを予感させることになる。つまりこの場面こそが、大君物語の実質的「始発」なのであった。

ところで、「橋姫」である大君の待つ相手は、俗へ聖」と呼ばれる父親であり、薫は自らを「高瀬さす」船頭になぞらえたのであった。俗へ聖」の娘、あるいはへ聖」を指向する処女である大君は、「古今集」以前の最も始原的な「橋姫」Ⅱ「橋を守る美しい女神(巫女)」として薫にとらえられている。しかしその後、八の宮は死に、薫はその遺言通り姫君たちの後見人となる。つまり第二の俗へ聖」となることを求められるわけだが、結果的には大君に結婚を執拗に迫り、その心を追い詰め、死に至らしめてしまう。薫は八の宮を継いで第二の俗へ聖」となることはできなかった、大君によって待たれる対象とはなり得なかつたのである。「橋姫」の贈答は、薫が大君をへ聖」Ⅱ八の宮のもとへ導く(死に追いやる)船頭となつてしまふという、その後の皮肉な展開をも予示していたのである。

(2) へ中の君」の橋姫物語

薫は、求愛を拒み続ける大君に、中の君さえ結婚させてしまえば：と一計を案じて、匂宮をその寝所へ引き入れる。中の君は突然の結婚という事態に戸惑い動揺するものの、しかし匂宮の真摯な態度に次第に心打ち解けてゆく。

明けゆくほどの空に、妻戸おし開けたまひて、もろともに誘ひ出でて見たまへば、霧りわたれるさま、所がらのあはれ多くそひて、例の、柴積む舟のかすかに行きかふ跡の白波、目馴れずもある住まひのさまかなと、色なる御心にはをかしく思しなさる。山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御容貌のまほにうつくしげにて、限りなくいつきすゑたらむ姫宮もかばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの、わが方さまのいといつくしきぞかし、こまやかなるにほひなど、うちとけて見まほしう、なかなかなる心地す。…今朝ぞ、ものあやめも見ゆるほどにて、人々のぞきて見たてまつる。「中納言殿は、なつかしく恥づかしげなるさまぞそひたまへりける。思ひなしのいま一際にや、この御さまは、いとことに」などめできこゆ。

〔総角二八二―二八五頁〕

少しずつ白んでゆく空に、匂宮と中の君は「もろともに誘ひ出でて、へ宇治川の情景」を眺めやる。元来宇治は、夕霧の別邸がそうであるように「権本卷一六九頁」、またかつての八の宮邸がそうであったように「橋姫一二五―一二六頁」、貴族の別荘地であった。

ここに描かれた「柴積む舟」の情景は「世の中を何にたとへむ朝は
らけ漕ぎ行く舟の跡の白波」⁽¹⁵⁾を踏まえることによって、旅の宿り、
景勝地としての宇治の姿をあらわにしている。このような風雅の世
界がそのまま現出したかのような「宇治川の情景」は、「霧りわた
れる」風情と相俟って、非現実的な「をかし」の世界を現出してお
り、今上帝の寵児として大切にかしずかれてきた「色なる御心」の
匂宮は、「この見馴れぬ宇治の光景に触発される」ところから、いよ
いよ中の君の美しい風情に感動をいだきなやすことになる⁽¹⁶⁾のであ
るが、しかしここで中の君が比類なき理想の女性女子の宮を超越す
る位置におかれるのは、「山の端の光」もさることながら、本来の
「宇治の橋姫」の持つ神聖さ、神々しさが重ね合わされているため
なのでもあろう⁽¹⁷⁾。

ところで、「山の端の光」を受けて美しく輝く男女の姿は、「明う
なりゆけば、(薫)さすがに直面なる心地して……」⁽¹⁸⁾「橋姫一四九頁」、
「明くなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ。……(大君)
今だに。いと見苦しきを」⁽¹⁹⁾「総角二三八頁」、「(薫)かばかりの御け
はひを慰めて明かしはべらむ。……しるべせしわれやかへりてまど
ふべき心もゆかぬ明けぐれの道」⁽²⁰⁾「総角二六七頁」等と、曙光を拒
み続けた大君と薫の物語とはあまりにも対照的である。光を浴びる
こと、つまり共に朝を迎えることを再三にわたって拒否し続けてき
た大君の物語は、もはや「宇治の橋姫」物語としては何の進展も望
めないと行ってよい。したがってこの場面は「橋姫」の交代、新し

い「宇治の橋姫」物語の展開を予感させるのであり、換言すれば中
の君物語はここで実質的に「始発」するのだといえよう。

では、中の君の「宇治の橋姫」物語は今後どのような展開が予想
されるのであろうか。

……人々いたく声づくりもよほしきこゆれば、京におはしまさむ
ほど、はしたなからぬほどにと、いと心あわたたしげにて、心
より外ならむ夜離れをかへすがへすのたまふ。

中絶えむものならなくに橋姫のかたしく袖や夜半にぬらさ
ん

出でがてに、たち返りつつやすらひたまふ。

絶えせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわた
るべき

言には出でねど、もの嘆かしき御けはひ限りなく思されけり。

〔総角二八三―二八四頁〕

匂宮の贈歌中の第三句で、中の君は「橋姫」に見立てられる。こ
の歌は前掲『古今集』歌①の「はしひめ」「衣かたしき」「こよひ」
を、同②の「中たえ」を重ね的に引くことで一首を構成しており、
またこれに應える中の君の歌も、①の「待つ」、②の「たえ」「うち
はし」「中」を重ねて引用している。

三日夜の後朝、美しい男女が曙の光の中、切ない思いを抱えつつ
互いを見交わす——この場面は、その背景として「宇治の橋姫」
の幻想的な恋物語を想起させながら、同時に一方で、人生の門出の

時であるにもかかわらず『古今集』恋歌四（恋の終末を予感させる歌）、恋歌五（別離後の歌）を踏まえてしまっているという点で、その直後からの「中絶え」という二人の暗い未来を暗示するものであった。

そもそもこの結婚の实质はいなかるものであったのか。無論この結婚が、薫が大君を手に入れるための計略であり——結果的にはそれが裏目に出、大君の拒否感はますます募つてゆくのであるが——少なくとも大君の体面をそこなうことになる結婚の不成立だけは避けねばならぬことであつた。しかしだからと言って、この結婚が中の君の妻としての位置・立場を確約するものであつたとは言ひ難い。事実、結婚三日目の夜、宇治に赴こうと機会を狙う匂宮に母明石中宮は、

なほかく独りおはしまして、世の中にすいたまへる御名のやう
やう聞こゆる、なほいとあしきことなり。何ごともの好まし
く立てたる心なつかひたまひそ。上もうしろめたげに思しのた
まふ。
〔総角二七六頁〕

と諫言する。また結婚後も、宇治を訪問できず煩悶する匂宮に、
「御心につきて思す人あらば、ここに参らせて、例ざまにのど
やかにもてなしたまへ。」と、大宮は明け暮れ聞こえたまふ。

〔総角三〇三頁〕

と妥協策を持ち出す。これはそのまま都における匂宮の立場を表している。つまり中宮から見れば、この結婚は所詮「色好み」とい

う匂宮の艶聞（悪評）を広めるものでしかなく、それは言い換えれば、都社会において認められない妻は妻ではない、匂宮が依然「なほかく独りおはしまして」である状態に変わりはないということなのである。匂宮自身も結婚後、中の君の処遇について、

なべてに思す人の際は、宮仕の筋にて、なかなか心やすげなり、
さやうの並々には思されず……
〔総角二九〇頁〕

と、思案を重ねているが、これも女房（召人）として迎えとられても何らおかしくないという中の君の不安定な立場を示している。

つまりこの結婚は、当面宇治という特殊な立場を除けば、その有効性を主張し得ないのが現実なのであつた。匂宮によつて辛うじて守られたこの結婚という形態は、実はそのまま匂宮の「宇治の橋姫」へのこだわりなのであり、それは、中の君が単なる妾ではないという位置付け、その後都に引き取られ、世に「幸ひ人」と呼ばれるも一つの未来をも暗示するものだったのである。

ところで、匂宮の我が「橋姫」との呼び掛けに、中の君は「待つ女」として返歌をした。つまり「宇治の橋姫」となることを承引したのである。この点で中の君は、『古今集』の「宇治の橋姫」に最も近い造型がなされているということができようであろう。しかし大君の死の翌春、中の君は二条院に引き取られることになる。これは「宇治の橋姫」がその存在の根拠たる宇治を離れることを意味している。

住み馴れた思い出の土地を捨て、遠い過去の記憶でしかない都で

新しい生活を送ることは中の君にとって大きな不安であったが、しかしまた誰一人として身寄りのなくなつた今、頼れるのは夫句宮の愛情だけなのである。都のうちで愛する人と共に生きる——「宇治の橋姫」Ⅱ〈待つ女〉にとつて、都に引き取られるということはある意味望むべき理想の姿であつたはずである。しかし都に移つた中の君を實際に待ち受けていたのは、句宮と夕霧右大臣の娘六の君との縁組であつた。いくら政略結婚とはいえ、上京後三ヵ月余りを持ち上がつてきたこの縁談話に中の君の悲嘆は深く、次第に望郷の念を募らせてゆく。

よそにて隔たる月日は、おぼつかなさもことわりに、さりとともなど慰めたまふを…。

〔総角二九五頁〕

山路分け出でけんほど、現とおぼえず悔しく悲しければ、なほ、いかで忍びて渡りなむ、むげに背くさまにはあらずとも、しばし心をも慰めばや、憎げにもてなしなどせばこそ、うたてもあらめ、など心ひとつに思ひあまりて…。〔宿木四二二頁〕

女君は、…山里にあからさまに渡したまへと思しく、(薫に)いとねむごろに思ひてのたまふ。〔宿木四二五頁〕

一方の句宮は予想に反した六の君の美しい風貌に魅せられ、中の君のもとへは夜離れの日々が続く。中の君は、「もし宇治に留まっていたら、それはそれで我慢できようものを。今は長の別れではなく、ほんのひととき宇治にかえつて心を休ませたい」とまで思いつめるようになるのであるが、しかしここで重要なのは、中の君は決

して句宮との離別を願っているわけではないということであろう。中の君は宇治にあつて句宮の訪れを待ちたいと考えている。つまり宇治で男を独り淋しく〈待つ女〉Ⅱ「宇治の橋姫」に戻ることを希求しているのである。

『古今集』の「宇治の橋姫」は、訪れない、あるいは訪れの間遠な男を〈待つ女〉であり、それは〈忌避すべき境遇〉なのであつた。しかし「宇治の橋姫」であるはずの中の君は、宇治を離れ、都での厳しい〈現実〉と向き合うことにより、原郷たる宇治で〈待つ女〉であつた方がよかつたことを認識する。中の君にとつて「宇治の橋姫」は、〈回歸すべき境遇〉なのである。中の君の「宇治の橋姫」物語は、『古今集』の「宇治の橋姫」像を正確になぞりながら、しかしその究極的理想(上京)が実ははかない夢物語でしかなかつたことを示すという皮肉な逆転現象を語っているのである。

しかし最終的に中の君の宇治帰郷が果たされることはない。宇治行きを頼むことのできる唯一の人物——薫からの思わぬ添い臥しは、もはや誰も頼むことはできない、都のうちで生きるしかないことを中の君に覚悟させるのである。中の君の「宇治の橋姫」物語は、回帰を切望する「宇治の橋姫」を断念することで終息せざるを得ないのであつた。

(3) 〈浮舟〉の橋姫物語

恋情を訴え続ける薫に中の君は異母妹浮舟の存在を語る。浮舟に

亡き大君の面影を見た薫は、三条の小家から強引に連れ出し、宇治に隠し住ませるが、しかしその後はなかなか足が向かず、そうしているうちに句宮が浮舟の居所を突き止め、強引に契ってしまう。

— そんな折りも折り、薫が久々に宇治を訪問する。大君を偲ぶ薫、二人の男を通わせてしまっている自分を顧み煩悶する浮舟、共に「宇治川の情景」を眺めながら、しかし両者の心は遠く隔たってしまったている。

山の方は霞隔てて、寒き洲崎に立てる鶴の姿も、所がらはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはるばると見たさるるに、柴積み舟の所どころに行きちがひたるなど、ほかにて目馴れぬことどものみとり集めたる所なれば、見たまふたびごとに、なほ、その昔のことのただ今の心地して、いとからぬ人を見かはし^いたらむだに、めづらしき中のあはれ多かるべきほどなり。まいて、恋しき人によそへられたるも、こよなからず、やうやうもの心知り、都馴れゆくありさまのをかしきも、こよなく見まさりしたる心地したまふに……

〔浮舟一四五頁〕

かつて「宇治川の情景」は、大君との贈答の場面で薫の心象風景を表わすものとして印象的に語られていた。しかしここに描かれた春「霞」は、周囲の山々を隔てるばかりで、かつての秋「霧」のように薫の心の奥底にまでは立ち籠めていかない。「宇治橋のはるばると見たさるる」様子は、むしろ中の君物語にみえた「宇治橋のいともの古りて見えわたさるるなど、霧晴れゆけば……」〔総角二八

二頁〕を連想させるものであり、眼前の景色を「いとをかしう」感じる薫の姿もまた、「色なる御心にはをかしく思しなさる」〔総角二頁〕句宮の姿と重なってくるものである。この場面における薫は「実直人」というよりもむしろ「色好人」あるいは「懸想人」としての性格がより強調されているといつてよからう。この情景を前にした薫は、「この中になれば、それがたとえ大君ゆかりの女性でなくともきつと心惹かれるに違いない、ましてそれがよく似た浮舟であれば……」と考えるのであるが、それは慕わしい大君との記憶そのものである「宇治川の情景」それ自身が、女を輝かせ、その魅力を引き出す「へ力」を持っているのだと感じているためである。事実、浮舟はそれまで、

いとよく思ひ出でらるれど、おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。いといたう児めいたるものから、用意の浅からずものしたまひしはやと、なほ、行く方なき悲しさは、むなしき空にも満ちぬべかめり。

〔東屋九六頁〕

故宮の御事ものたまひ出でて、昔物語をかしうこまやかに言ひ戯れたまへど、ただいとおつしましげにて、ひたみにち恥ぢたるを、さうざうしう思す。

〔東屋九九頁〕

と、美点以上にその欠点が語られていた。浮舟は始めから大君の形代として求められ、ゆえにことあることに薫を失望させてしまっていたのだが、しかし「宇治川の情景」が、大君との慕わしい過去の記憶そのものとなった今、換言すれば大君への深い愛情が眼前の

へ宇治川の情景の中へと昇華された今、浮舟は形代であることを超えて、一人の女として、その魅力、価値を認められてゆくことになるのである。

しかしそんな薫とは対照的に、浮舟の憂悶は、ますます深まってゆく。

…女はかき集めたる心の中にもよほさるる涙ともすれば出で立つを、慰めかねたまひつつ、

「宇治橋の長きちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心さわぐな

いま見たまひてん」とのたまふ。

絶え間のみ世にはあやふき宇治橋を朽ちせぬものとなほたのめとや

さきさきよりもいと見棄てがたく、しばしも立ちとまらまほしく思さるれど、人のもの言ひのやすからぬに、今さらなり、心やすきさまにてこそなど思しなして、暁に帰りたまひぬ。いとようも大人びたりつるかなと、心苦しく思し出つることありしにまさりけり。

〔浮舟一四五―一四六頁〕

薫のおくった歌は眼前の宇治橋の景によそえた、自らの変わらぬ愛を表明するものであったが、しかし実際は途絶えばかりの多いその不誠実さを、誠実な夫としての未来を約束することで覆い隠そうとするものであった。また当の宇治橋も「はるばると」〔浮舟一四五頁〕、「いともの古りて見たさるる」〔総角二八二頁〕有り様で、

『源氏物語』「宇治」の女君たち（磯部 一美）

これをもつて「朽ちせじ」と詠みかけてくる薫に浮舟は誠意を感じることができない。¹⁹⁾ 浮舟は眼前の今にも朽ちそうな宇治橋と前出「古今集」歌②の男に顧みられない絶望感を詠んだ歌を踏まえることによつて、その絶え間の多さを詰り、文字通り二人の「あやふき」仲への不安を訴えるのであるが、しかし薫はこの危機感をまったく理解できず、むしろ浮舟が自らを「待つ女」として受容しているものだけとらえるのであった。

薫は都に戻つてからも浮舟のことを想い続ける。

…大将、人にもものたまはむとて、すこし端近く出でたまへるに、雪のやうやう積もるが星の光におほほしきを、「闇はあやなし」とおほゆる匂ひありさまにて、「衣かたしき今宵もや」とうち誦じたまへるも、はかなきことを口ずさびにのたまへるもあやしくあはれなる気色そへる人さまにて、いともの深げなり。言しもこそあれ、宮は寝たるやうにて御心騒ぐ。おろかには思はぬなめりかし、かたしく袖を我のみ思ひやる心地しつるを、同じ心なるもあはれなり、わびしくもあるかな、かばかりなる本つ人をおきて、わが方にまさる思ひはいかてつくべきぞ、とねたう思さる。

〔浮舟一四七―一四八頁〕

二月十日頃、宮中で作文会・管弦の宴の後、薫は「衣かたしき今宵もや」と吟誦する。そのなまめかしい姿態、芳香はまさしく恋する男のそれであり、これに薫の浮舟への並々ならぬ執着を感じとり焦慮した匂宮は、橋の小島の隠れ家に浮舟を連れ出し耽溺の二日間

を過ごすことになる。ここでは薫によって浮舟が「宇治の橋姫」ととらえられることにより、それが匂宮の焦燥感を駆り立て、物語を展開させていく「へ力」となっていることが確認できよう。と同時にこの場面は、今後一人の女と二人の男とによって新たな「宇治の橋姫」物語が展開されてであろうことを予感させるのである。そう考えると、薫の心を揺り動かし、浮舟を「宇治の橋姫」と呼ばしめる契機となった「宇治川の情景」の場面こそが、浮舟物語の実質的「始発」であったということができよう。

ところで、浮舟は最初、大君、中の君と同様に「待つ女」として登場したのであった。しかしそれはただ一人の男を「待つ女」ではない。薫をそして匂宮を「待つ女」である。やがて両者からは都にひき取る旨の文が度々寄せられるようになるが、しかしそのどちらを選ぶこともできない浮舟は次第に追いつめられ、結果、入水を覚悟することになる。都に行くこともできず、かといって宇治に留まることができない浮舟は「待つ女」であることを放棄するのである。『古今集』の一人の男を「待つ女」は、浮舟物語においては二人の男を「待つ女」となり、さらには「待つことを放棄する女」へと変容していったのであった。

『源氏物語』はその後の「宇治の橋姫」の物語を語ろうとはしない。浮舟の出家、小野での暮らしはもはや別の物語なのであり、『源氏物語』における「宇治の橋姫」物語は、ここで実質的に終焉を迎えることになるのである。

三、おわりに

これまで大君、中の君、浮舟における「宇治の橋姫」物語を、それぞれ「宇治川の情景」とのかかわりの中で見てきたわけだが、それらの基底には『古今集』の「宇治の橋姫」の世界が潜んでおり、その「宇治の橋姫」像が模倣されたり、あるいはずらされたりすることで『源氏物語』独自の「宇治の橋姫」物語が展開されていることが確認できたのではないだろうか。

大君は、古伝承にみえる「宇治橋の女神」、『古今集』における「待つ女」のイメージを踏襲しているが、結果的には「宇治の橋姫」となることを拒否し、物語から退場していった。中の君は、男を「待つ女」であり、『古今集』のイメージをそのまま踏襲しているが、宇治を離れることでヒロインの座から滑り落ちていった。浮舟は、一人ではなく二人の男を「待つ女」であった。しかし、そのどちらを選ぶこともできず入水を覚悟する。つまり「待つことを放棄する女」なのであった。

繰り返すが、物語はいったん男女を「宇治川の情景」の中におくことで、その度ごとにあらためてその人物たちを「宇治の橋姫」物語の主人公として据え直している。それはこの「物語」が、その男女の関係性を少しずつずらしながら、つまりは当初の「動機」を「変奏」させながら、「遁走曲」的に同じ主題を繰り返し語ろうとしているためなのである。

さて、こうしてみると、『源氏物語』における「宇治の橋姫」の物語は、究極的には「宇治の橋姫」を存在させてはいないことに気付かされるのではないか。つまり、古来人々に親しまれてきた「宇治の橋姫」の物語は、『源氏物語』においては実現しないのである。そして恐らくそれは『源氏物語』の大きなテーマである男女の恋物語の、その一番最後に位置付けられていることとも決して無縁ではあるまい。つまり「宇治」の物語は、文字通り恋物語に対する「憂し」の物語でもあったのである。

「宇治の橋姫」の物語は、最後の女主人公浮舟の入水という形で終息する。そうして恋愛を語ることが放棄した物語は、ゆつくりと「出家」への道程について語りはじめる――。

注

(1) 引用本文は、『古今和歌集全評釈(下)』(竹岡正夫著 昭和51・11 右文書院)に拠る。掛詞等の指摘についても、同書に拠る。

(2) 柳田国男「橋姫」(『定本柳田国男全集第五巻』筑摩書房 昭和43・10 初出は大正7・1)。

柳田の説を引用していると見られるものは、寺本直彦「古典注釈と説話文学」(『日本の説話』第4巻中世II 東京美術 昭和49・6)、吉海直人「橋姫物語の史的考察―源氏物語背景論―」(國學院大学大学院紀要文学研究科紀要13 昭和57・3) ↓「橋姫物語の史的考察」(『源氏物語研究(而立篇)』影月堂文庫 昭和58・12)、石原昭平「宇治の伝承」

『源氏物語』「宇治」の女君たち(磯部 一美)

(『講座源氏物語の世界(第8集)』有斐閣 昭和58・6)、小嶋正亮「待つ女から嫉妬する女へ―橋姫―」(『宇治をめぐる人びと』宇治文庫6 宇治市歴史資料館 平成7・3)、糸賀きみ江「宇治の橋姫」受容考(青山語文26 平成8・3)、原田敦子「橋を守る女神―宇治橋姫伝承考―」(『古代伝承と王朝文学』和泉書院 平成10・7)等。

(3) 北川忠彦「王朝の文学と宇治」(『宇治市史I古代の歴史と景観』宇治市役所 昭和48・1)

(4) 久曾神昇「古風土記逸文「宇治の橋姫」其他に就て」(國學院雑誌42-12 昭和11・12)、桑原博史「宇治の橋姫伝説と橋姫物語―中世小説成立の一過程―」(國語と國文學 昭和34・6)、保里十三子「橋姫物語考―橋姫物語と関連して―」(『東洋大学短期大学論集国語篇』5 昭和44・3)、三角洋一「橋姫物語」の位相(日本文学33-4 昭和59・4)、伊藤千世「橋姫物語」の古体性(愛知淑徳大学国語国文16 平成9・11)、他注(2)吉海論文等。

(5) 「橋姫」「宇治川」「宇治橋」に関する論考は多く、管見に入った限りでも計四十六本に上る(柳田論文以外は昭和十年以降。「国文学年鑑」、源氏物語講座10「源氏物語研究文献目録」、吉海直人編「源氏物語ハンドブック」(吉海直人編)、「國文學 解釈と教材の研究」(各号「学会教育界の動向」欄)等を参照。ただし「源氏物語」関係論文は、表題に「橋姫」「橋姫物語」等を冠していても、内容が「宇治の橋姫」と直接関わっていないものについては除いて算出している。内容としては概ね①歴史的観点(風土・歴史)からのもの、②「宇治の橋姫」伝承並びに散逸物語「橋姫物語」についてのもの、③歌枕・歌集等、和歌史における位置付けについてのもの、④「源氏物語」における「宇治の橋姫」についてのもの、

⑤その他（史料整理等）に大別することができる。

- (6) 高橋亨「宇治物語時空論」（國語と國文學51—12 昭和49・12）↓（『源氏物語の対位法』東京大学出版会 昭和57・5）、広川勝美「源氏物語・宇治時空試論—その基層と表層—」（日本文学24—1 昭和50・11）、今井源衛「宇治橋」の贈答歌について—宇治十帖の主題—」（春日春男教授退官記念語文論叢 昭和53・10）↓（『紫林照徑—源氏物語の新研究』角川書店 昭和54・11）等。

(7) 例えば高橋氏は前掲論文の中で、大君と中の君を「宇治の橋姫」として掲げている。また広川氏は、浮舟を橋姫物語の継承者として位置付けている。

(8) 『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集本（阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳 小学館）に拠る。また、私に適宜傍線等を付し、下には巻名・頁数を記した。

(9) 新編全集『源氏物語』一四八頁頭注二、三。

(10) 上坂信男氏は「小野の霧・宇治の霧」（『源氏物語—その心象序説—』笠間書院 昭和49・5）において、「大君の眼に映った『秋霧』も父を思い遣り、わが将来を思う吐息を思わせる。心の霧と重なり合って薫の捉えた霧と同質のものであろう」と述べている。

(11) 小町谷照彦「大君物語の始発—和歌的な視点から—」（日本文学24—11）↓「大君物語の始発—「橋姫」「椎本」の展開」（『源氏物語の歌」とば表現』東京大学出版会 昭和59・8）

(12) 鈴木日出男「古典への招待 人物造型について」（新編全集『源氏物語』⑤ 小学館 平成9・7）

(13) 注(11)に同じ。

(14) 注(2)系賀論文等に同様の指摘がある。

(15) 題知らず 沙弥満哲（卷第二十・哀傷歌）なお引用本文は、新日本古典文学大系『拾遺和歌集』（小町谷照彦校注 岩波書店 平成2・1）に拠る。古来諸注はこれを引いている。

(16) 鈴木日出男「源氏物語の場面」（『源氏物語研究集成 第三卷 源氏物語の表現と文体（上）』風間書房 平成10・11）

(17) 「宇治の橋姫」の高貴性については注(1)の他、注(2)石原論文等にも指摘がある。

(18) 新編全集『源氏物語』二八五頁鑑賞・批評欄。

(19) 伊藤博氏は「宇治橋の長き契り」（『源氏物語の基底と創造』武蔵野書院 平成6・10）の中で同箇所を取り上げ、「この詠み口自体に薫の浮舟にのぞむ態度のおざりさが露呈している、と見るのがちがすぎであらうか」と述べている。